三重・辻子（つじこ）遺跡

1　所在地　三重県三重郡朝日町大字埋縄字辻子
2　調査期間　第二次調査　一九九九年（平11）七月～一二月
3　発掘機関　三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター
4　調査担当者　倉田文美・田中久生
5　遺跡の種類　集落跡
6　遺跡の年代　弥生時代～室町時代
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

辻子遺跡は、伊勢平野の北部、鈴鹿山地から流れる朝明川の下流部北岸に立地している。朝明川の北側背後には、朝日丘陵から細かな尾根が派生しており、遺跡はその間を開析する小さな谷口付近に位置し、谷から南に向かい緩やかに傾斜する。遺跡の面積は二万七六〇〇㎡、現標高は九～一四ｍである。この地域は条里制地割の存在が指摘されていたが、昭和四〇年代の圃場整備によって旧地割は失われている。

（桑　名）

辻子遺跡の発掘調査は一九九八・九九年に第二名神高速道建設に伴って進められ、弥生時代から古墳時代前期と、平安時代後期から室町時代の集落が存在することが判明した。特に、条里制地割に伴うとみられる溝は、朝明郡の条里方位に乗っており、一辺約一〇九ｍの方形区画を二区画構成する。条里坪界溝の西側では掘立柱建物群が検出された。建物は桁行四～七間でほぼ方向を揃えて建てられており、計画的な配置が窺える。建物周辺・溝・土坑から、下駄・箸・曲物などの木製品や灰釉陶器・山茶碗・転用硯・磁器片の他、「廿」「上」「市」「め」「蓮」「大」「〇」などと記された多数の墨書土器が出土している。墨書土器は、灰釉陶器や山茶碗の底部外面や胴部外面に、一文字を記したものが大半である。

木簡は二点出土した。(1)は、Ｉ―五地区の土坑ＳＫ八七二から出土した。ＳＫ八七二は掘立柱建物の南西にあり、平面は三・一ｍ×二・二ｍの不整円形、深さ〇・五ｍの土坑である。出土遺物には灰釉陶器・ロクロ土師器・下駄などがあり、一〇世紀後半頃と考えられる。

(2)は、Ｇ地区の溝ＳＤ六一六から出土した。ＳＤ六一六は条里坪界溝の南角に南西方向からＴ字状につながるとみられる幅四〇～六〇㎝深さ一五㎝の溝である。出土遺物が少なく、遺構の時期は不明である。

8　木簡の釈文・内容

SK八七二

(1)　「□□□
□□□□□□□□
□　□□　承□□枚□『武武武武』
利□□大和恒友桓」
635×89×15　051

SD六一六

(2)　□□□□□　(112)×(15)×(8)　081

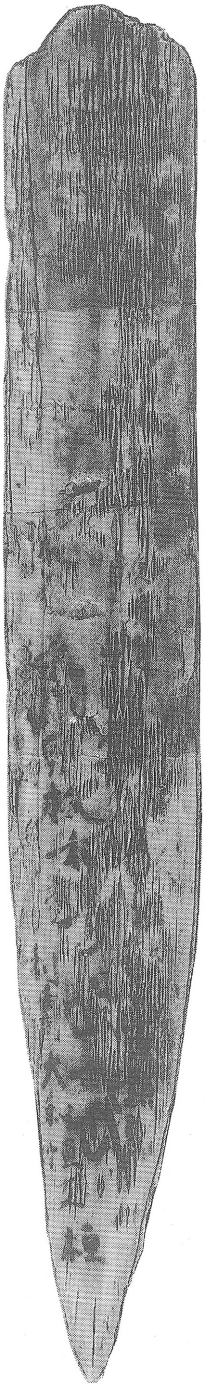
(1)は、表面が傷んでおり、判読不可能な部分が多い。上端はやや傷んでいるが圭頭に加工している。下端は舟形に尖らせる。

(2)は、墨痕は鮮明であるが、欠損のため判読不可能である。

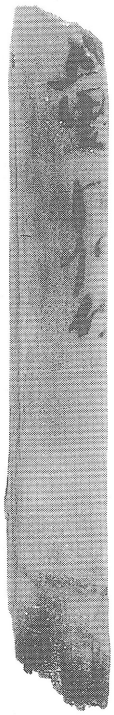
9　関係文献

三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市ＪＣＴ　埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』（二〇〇〇年）

（田中久生〈青山町教育委員会〉）



(1)



(2)